

NGO外国人救援ネット・ニュース, No.7

NGO外国人救援ネット, 1999.3.25

請求記号:震災-6-z33. - 13p

* 震災関連記事のみテキスト化しています

巻頭言

NGO外国人救援ネット 日比野 純一

多言語にワクワク！

最近、双方向という言葉をよく耳にする。自分も知らずに会話の中でこの言葉を使っていることがある。やりとりが双方向であるということは、「一方的」の反対だから良いことの方が多い。しかし、双方向はおろか一方のやりとりもできていないことがこの社会にはたくさんあることを、私たちは阪神・淡路大震災でガツンと思い知らされた。その一つがなんと情報である。双方向という言葉がもっとよく使われる分野なのに.....。

震災救援のためにやって来た自衛隊を見て、非常事態に乗じてクーデターが発生したと震えた人がいた。また震災の翌日に液化天然ガスのタンクに亀裂が入り周辺地区への避難勧告が出されているにもかかわらず、傾いた家の中で途方に暮れていた人がいた。どちらも、藁をも掴みたい困難の中で言葉の壁により必要な情報を得ることができなかった外国人だ。震災時の情報はほぼすべて日本語のみで発信されていた。今まで放置されていた未解決問題が一気に外国人住民にふりかかったのだ。言葉の通じぬ外国で医者に行かねばならない病気にかかった時の自分を想像して欲しい。言葉はコミュニケーションを交わすのに用いる道具であると同時に、生きていく上で大切な情報を得るための手段なのだ。

こう言うと、日本に住むからには日本語を覚えるべきだ、という反論を受けることがある。確かにそうかもしれない。しかし、3K職場の労働力確保という国の勝手な事情で受け入れておきながら、日本語学習を自助努力だけにまかされている日系中南米人や、難民として渡ってきて定住促進センターでわずかに3、4ヶ月の学習機会しか保証されずに自立を求められるベトナム人に、同じことを言えるだろうか。

多言語環境の整備は、日本語学習制度の不備を補うという後ろ向きの姿勢から出発するものでもない。国境を越えた人の移動は、どんなに敷居を高くしても国家は止められない。それは歴史の必然だ。それなら、いろいろな国から渡って来る人が最大限に力を発揮できる社会をつくるべきではないか。

その環境整備の一つが多言語化。多言語化とは情報を共有化することだ。一つの情報を様々な文化背景を持った人が受け取って、そこから斬新なアイデアが幾つも生まれ広がりを見せていく、そう考えるだけで多言語でたくさんの人と「会話」ができる社会はワクワクものだ。

吠 そんな仕組みづくりに、FMわいわい、多文化共生センター、神戸アジアタウン推進協議会などのNGO外国人救援ネットのメンバーが取り組んでいる。約一年かけて多言語情報の音声データベースができたところだ。ワクワクは確実に近づいている。